

2020. 12. 6. アドヴェント第2主日礼拝式説教

聖書：イザヤ書59章 12-20節

『主は激しい流れのように』

今朝皆さんと一緒に聞こうとしている聖書箇所は教会暦に基づく聖書日課で示された箇所です。アドヴェントの第2主日に読むように指定された箇所です。どうしてなのか、ということも心に留めつつ聞いていきたいと思えます。

イザヤ書59章の預言が書き記されたのは、イスラエルが半世紀に及ぶバビロニア捕囚から解放された後の時代です。イスラエルはバビロニアとの戦いに敗れて、捕囚民として強制的に連行され、言語も、文化も、宗教も、習慣もすべて違う他国での生活を余儀なくされ、強制移住させられるというすさまじい体験をします。

その捕囚生活から解放されたとき、その地に留まる人たちも少なからずいました。当然です。そこで生まれ育った人たち、バビロニア生まれの二世、三世の時代になっていたからです。一方で、自分たちの国に帰った人たちは以前とは全く違う荒廃した国土や町を見ることになります。イスラエルの民にとっての心の拠り所であり、信仰生活の中心であった神殿はバビロニア帝国によって壊され、跡形もなくなっていました。またイスラエルに残った民、この人々との確執もあり、帰還した捕囚民にとってイスラエルの国、エルサレムの町は自分たちが思い描くものとは大きく異なっていました。豊かな生活、心安らぐ母国での生活が待っていたわけでもなかった。そのような中、帰還した民にとっての切なる願いは神殿の再建でした。しかし神殿の再建はさまざまな事情から、容易に進みませんでした。

後に、総督ゼルバベル、大祭司ヨシュアといった人により神殿の再建事業は進められ、神殿建設に向かうのですが、それはさらに後の話です。

遅々として進まぬ神殿再建。容易ならざる日々の生活。イスラエルの民がバビロニアに在って夢見ていた母国での生活は、ことごとく彼らの期待とは違っていました。捕囚の生活は、比較的緩やかとはいえ、奴隷の民の生活です。様々な抑圧があったでしょう。その抑圧から解き放たれ、祖国に帰還してきた者たちにとって、それは出エジプトと同様、約束の地への帰還であり、神殿建設が進められるとともに、メシアなる神の王国が、今度こそイスラエルに建てられるといった、劇的な変化が起こるであろうことを期待していたのでしょうか。

しかし現実はそのようではなかった。彼ら彼女たちが思うような薔薇色の生活になったわけでも、期待がかなえられたわけでもなく、相変わらず近隣諸国に依存する小国としての悲哀を味わいながら細々とした歩みを続けていく日々だったのです。

こうした中で、人々は神への不満や、不平を募らせます。神はわたしたちを本当救おうとしているのか、神の恵みと祝福はなぜわたしたちに注がれていないのか。人々は嘆き続ける。イザヤ書59章はこうした背景の中で、人々に向けて語られた預言者の言葉です。

1節「主の手が短くて救えないのではない。主の耳が鈍くて聞こえないのではない。むしろお前たちの悪が、神とお前たちとの間を隔て、お前たちの罪が神のみ顔を隠させ、お前たちに耳を傾けられるのを妨げているのだ」。

思い描くような現実にならない中で、イスラエルの民は神を嘆き、神に不平を不満をぶつけた。神の手が短くて、我々を救えないのだ、と。主の耳が鈍くて、わたしたちの声が聞こえないのだ、と。それは現代でも同じ。思わぬ困難の中で、神がおられるのなら、なぜこんな困難があるのか。それは神の手が短くて、我々を救えないのだ、と人はつぶやくのです。神にはわたしたちの嘆きの声が聞こえていないのではないかと嘆くのです。しかし預言者は、そうではない、と言う。お前たちの悪が神との間を隔て、お前たちの罪が神の御顔を隠させているのだ、と。

罪の根っこには人間の「自分中心」というものがあります。わたしたちが「自分中心」の渦の中にいる時、わたしたちはわたしの思う方向でしか物事を見ていない。わたしの見方・視点でしか現実を見ようとしない。そもそも、イスラエルの民が描いた、祖国に帰ったらこうなってほしい、というのは自分たちが描いた期待、自分たちの思いこんだ期待に過ぎないのです。そして自分たちの期待通りにならなければ、神の手が短いから救えないのだ、と言い出す。視野が限定されている、というだけでなく、神のいらっしゃる場所、神が語りかけてくださっているところを見ようとしないのです。お前たちの悪が、神とお前たちとの間を隔てているのだ、お前たちの罪が聞いてくださらないようにしているのだ、そう預言者は語るのです。

罪とか、悪とかという言葉で、わたしたちは何らかの行為行動態度のようなことをイメージしやすいのですが、もちろんそれだけでない。生きている向き、

わたしたちの在りようそのもの、向かっている方向視線、そうした全部が神とわたしたちを隔てているのです。神の顔を見ない在りようになってしまっているのです。

12節「御前に、わたしたちの背きの罪は重く、わたしたち自身の罪が不利な証言をする。背きの罪はわたしたちと共にあり、わたしたちは自分の咎を知っている」。

預言者は神から託された神の言葉を語るとともに、その言葉によって照らし出された人間の姿を民に語り告げます。自分中心という在りようの中に入り込んでしまっている人間の罪は重い。それは神にまさに背を向けて、神に背いていく罪で、すれちがうどころか、神との接点がない。神と向き合っていないということです。神と向き合うためには、聖書の時代も今も、神の言葉の前に立つ以外にはない。預言者イザヤ、彼は神からの言葉を託された人なのですが、その預言者の言葉の前に立つ必要があります。わたしたちも今この59章の言葉の前に立つ必要があります。適当に聞き過ごしてはいけません。しかし私たちは自分の咎を知っている、と預言者は言います。咎というのはここではねじれ、ということです。ねじれというのは本来の関係からずれた状態のことです。おそらくイスラエルの人たちは、神を信じないとか、神を否定する、というようなこと言っていたわけではないでしょう。神を仰いで生きようとしていた。しかし、神を仰ぐその中でも自分中心であろうとしたのです。自分が納得するような仕方で、自分が期待するような形で神を求め、神と関わり、自分が了解できるものを求めて神の言葉を聞こうとしていたのではないかと。

だからイスラエルの民は、信仰生活をしているつもりだったが、それは自分中心で行われる行為であり、信仰とは別のものだった。神と向き合い、神の言葉を聞くということは、自分の願う方向で神の言葉を聞くことではなく、神の指し示される方向の中で神の言葉を聞く、という思いがなければ、叶わないことでしょう。つまりどこかで「自分中心」が放棄されて行かなければならない。そうでなければ、神とは隔たり、神の御顔は隠されてしまうのです。

「主は正義の行われていないことを見られた。それは主の御目に悪と映った。主は人一人いないのを見、執り成す人がいないのに驚かれた」神は人が皆ねじれて、神との本来の関係の中で生きる人がいない、正義つまり神との正しい関係が生きられていない、ことを見られた。かつ、人一人いない、神との関係を執り成す人がいないことに驚かれた、というのです。

預言者は他人事のようにイスラエルの民の罪を告発しているのではありません。イザヤは自分自身の罪の告白として語っているのです。だからこの59章でも「わたしたち」という言葉が繰り返されるのです。そしてそれは神の怒りや裁きの前に自分自身の身を差し出すことでもありました。その預言者が聞いたのは執り成す人一人がいない、という主の言葉でした。確かに預言者の働きは神と人との間に立って、己が身を差し出し託された神の言葉を語るのです。だが神と人とのねじれた関係を執り成すものではない。その関係を本来の関係へと回復するものではない。それは預言者の働きを超えるものなのです。

「主の救いは主のみ腕により、主を支えるのは主の恵みの御業」。神の救いは神ご自身のみ腕によるものであり、主の働きを支えるのは主ご自身の恵みの御業だ、というのです。人間が罪によって作り出した神とのねじれの関係。多くの場合、そのねじれにも気づかないままに、高を括って、逆に神に不平や不満をぶつけていた。しかし不平や不満を神にぶつけることはだれにでもあるし、それ自体が罪なのではない。そうではなく、不平や不満をぶつけている中でいつの間にか、神のほうを向かないで、自分中心の沼の中に沈み込み、そこからしか世界が見えなくなるのです。神から隔たり、神を御顔が隠されてしまう。そこからの救いは、神による。神の恵みの御業による他ないのだ。「主は激しい流れのように、主の霊がその上を吹く。主は贖う者として、シオンに来られる」。短くも確かな救い主誕生の預言であります。主の人間を救い、ねじれた関係を本来の関係と回復する種の恵みの業が激しい川の流れのように聖霊が吹き渡る。そして主は贖う者をこの世界に与えてくださる、という預言です。

深い泥沼のような罪の中にかからめとられているわたしのために、主の恵みの業がこの世界に齎される。このイザヤの預言の言葉の前に、わたしたち一人一人、喜びのうちに立ちたいと思います。